



節句人形の

『素朴なギモン』コーナー

Vol. 78

山車人形

祭りに登場する山車の上に飾られた人形を見たことはありますか。山車人形です。下から見上げて目撃的な存在感があります。

山車に乗せられる人形の種類は歴史上の英雄、神を模ったものなどが主です。いつごろから山車に乗せられ、運ばれるようになったのか。そもそも山車人形とは何か。祭りで活躍する山車人形を調べました。

山車人形は神の依代的な存在

山車人形は祭礼の際、山車の最上部に飾られる人形類である。大きさは人形によって異なるが、等身大の人間と同じくらいか、それよりもやや大きなものが多い。

モデルとなるのは神功皇后、

武内宿禰、神武天皇、鍾馗、関羽、日本武尊、弁財天などが代表的。神が依りつく対象物として存在することから、人の目をひく華美な観賞物に発展して、山車（出し）印とも呼ばれる。

山車人形は室町時代以降に登場したとみられ、15世紀前半に描かれた『祭礼草子絵巻』には山型と鳥居に、流鏝馬人形など造り物に乗せた大笠がみえる。

町内の宝として受け継がれる

山車人形は地域によって特徴や沿革が異なる。

まずは近畿地方。初期の『洛中洛外図屏風』に描かれた京都の祇園祭の人形は、高さを競う鉾は船鉾のみ。人間の体格と同じ大きさの人形は、重要文化財

を含む中世の甲冑・刀剣・能面・

装束を着用したものもあり、多くは昔のままの姿である。喜田川守貞著『守貞謾稿』では江戸の山車よりも古く、美物で、人形は「名工ノ作物」と評価されている。

次に中部地方。愛知、岐阜の山車人形の中心は尾張徳川家城下である名古屋の東照宮祭、若宮祭となる。精巧で奇抜なからくり人形が1770年には完成している。

からくり師である竹田近江にはじまり、1730年代以降、地元の玉屋忠兵衛、鬼頭二三制作の人形は場面展開の工夫に優れている。多くは人間より小ぶりな山車人形で周辺の高山祭や犬山祭などにも能に取材したからくりが残る。

関東で山車といえば江戸。江

戸時代から続く天下祭ではかつては山車が数十基も出た。山王祭、神田祭では1681年『撰要永久録』（江戸の法令書）に人形装束の禁制が記されるものの、江戸時代の末頃には三層高欄構造の楼上や、柱上に華美な織物装束を着た大型で豪華な山車人形が飾られていた。そうして作られた精巧な人形は、地域や町内で代々受け継がれていく祭礼道具の一つとなった。

山車人形を作る人形師は、とくに山車師とも称され、山車の装飾やデザインを全体的に統一させる役割も担った。雛人形などの名工として知られた原舟月や仲秀英らは山車人形にも名作を残している。



山車人形「賀茂」(室町二丁目)